

2015年8月16日（日）MJCC 主日礼拝メッセージ（要約） 柏倉

聖書：マタイ6：9

タイトル：『だからこう祈りなさい』

序.

先日、日本の安倍総理が戦後70年を迎えての談話を発表した。

その最初の言葉が、『8月は、私たち日本人に、しばし立ち止まることを求めます。・・・』というものであった。

第二次世界大戦中、日本とオーストラリアはまさに敵国同士であった。人々の上には命の危険が絶えずあった。

英語部にセドリックさんというおじいちゃんがいる。彼は戦中日本兵に苦しめられ、日本人に対して憎しみがあつた。しかし今は、キリストにあって平和が与えられ、敵であり憎しみであった私達日本人を愛し、祈りを捧げ、MJCCの皆が日本のどこから来たのか分かるようにと、会堂の後ろに掲示してある日本地図を購入してくださった。また牧師家族には、自動車の購入のための献金を捧げてくださった。彼の内にあるのは、キリストによって全く変えられた平和と平安と愛である。

戦中、日豪が互いの国を行き来し、平和に安心して生活できるなどとは、夢のまた夢、まったく不可能なことである！と、誰しもが思っていたのではないか。

しかし、今日、私達は戦後70年をこのメルボルンの地で迎えている。平和な時代となり与えられた『奇跡』である。（世界には様々な事情の国々が依然としてありますが…。）

私達は皆この『奇跡』を今日体験している。このことは本当に感謝である。平和のためにこれまで多くの祈りが捧げられてきた。

そこで改めて、祈りについて「主の祈り」から教えられたいと思う。

本.

マタイ6：9。

「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。』

ここから13節まで続いているのが、一般的に「主の祈り」と言われているものである。それは、イエスが弟子たちに「こう祈りなさい」と教えてくださった「祈り」なので、「主の祈り」と呼ばれている。

実は、同じような「主の祈り」が、ルカ11:2-4にも出てくる。ルカ書に記されているのは、マタイの箇所よりも少し短い。その違いは、おそらくイエスがこの「主の祈り」と呼ばれる「祈り」を、いろいろな場所で何度か教えていたことを、それぞれの著者が記す時に、少しの相違があつたと考えられる。しかしその本質においては全くの同じ意味である。

さて「祈り」とは、誰からも制限されないものである。それゆえ、どんな言葉でもどんな祈り方でも自由である。

しかし、その祈る言葉の内容には注意が必要である。何故なら、この「祈り」とは、私達の口とその心から出てくる信仰の言葉でもあるからである。ルカ6:45にはこのように記されている。

「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」

それゆえ人の口から出る「祈り」の言葉には、その人の心に満ちているものが映し出される（信仰の現れ）と言える。そうした意味では、『誰も胸を張ってお祈りすることは出来ない』と、思わず尻込みしてしまうこともあるのではないか。しかし、どんなに祈りが上手な信仰者でも欠けを持っている。ゆえに祈りにおいても残念ながら完全に神の御心にかなった祈りをささげるといのは本当に難しいことである。だからこそ、イエスは、私達に完璧な模範となる神の御心にかなった「主の祈り」を教えてくださいましたのである。言うまでもないが、“「主の祈り」以外にはお祈りをしてはいけない。”ということではない。私達はこの「主の祈り」を模範とし、さらに自分の言葉や表現を使ってお祈りすることが出来るのであり、そうした豊かな祈りを神にささげることが出来るのは感謝であり恵みである。

改めて9節

「・・・『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。』

イエスの祈りは、「天にいます私たちの父よ。」という神への呼びかけから、祈りを始めている。

呼びかけるときに、呼びかける神をしっかり意識することはとても大切なことである。

旧約の預言者が神に呼びかけるとき、彼らは神を明確に意識していたのが分かる。

ネヘミヤ 1:5「ああ、天の神、主。大いなる、恐るべき神。・・・」

ダニエル 9:4「ああ、私の主、大いなる恐るべき神。・・・」

彼らはモーセによって与えられた律法の中に、「みだりに主の御名を唱えてはならない。」という戒めがあることを知っていた。

それゆえ神に対して呼びかけるときには、恐れと敬意をもって、そして慎重に呼びかけたのである。もし、みだりに主の御名を口にすることでもあるなら、その者は殺されなければならなかったのである。だからこそ彼らは、「大いなる方、恐るべき神」と、自らが呼びかけた神の前に座しているという自覚をもって呼びかけたのである。

私達も祈りはじめの呼びかけのときに、恐れと敬意を持って神に呼びかけるということが大切ではないだろうか。

しかしイエスの呼びかけはエレミヤやダニエルと違い、「父よ」という言葉で呼びかけている。ギリシャ語の聖書では、まず初めに「父よ」という呼びかけの言葉から語られているのがわかる。その後で「私達の」と続き、さらに「天にいます」と続くのである。

ユダヤ人たちの中に「父よ」と祈ることがまったく無かったわけではないのだが、イエスの言われた「父よ」とは、アラム語の「アバ」という幼児語に当たる言葉である。これは、神のことを「パパ」とか「おとうちゃん」と呼んでいることになる。「アバ」とは、それだけ非常に親しみが含まれている言葉である。それは強い信頼で結ばれている関係としての言葉と言える。

「みだりに主の御名を唱えてはならない」と戒められている中で、イエスが弟子たちに教えられた、「主の祈り」の最初の呼びかけが、

「アバ」「父よ」「パパ」「おとうちゃん」という言葉であるのは、非常に特別でユニークであると言える。もしかすると弟子たちの内には戸惑いもあっただろう。パリサイ人や祭司長たちは、このことゆえにも死罪にあたりと殺意を燃やしていただろう。

聖書は、私達に恐れつつ敬意を持って神に呼びかけなさいという厳かなことも示しているが、イエスが呼びかけられたように、「アバ・父・パパ・おとうちゃん」と親しみを込め、さらに神を信頼して呼びかけることも良しとしてくださっているのである。

「みだりに主の御名を唱えてはならない」と戒められている中で、イエスは決してふざけて「アバ」と呼びかけたのではない。

続いて「私達の」「天にいます」とある。

通常、私達の地上での父親は一人しかいない。しかも地上の父は、時に虫の居所が悪ければ怒鳴るかもしれない。また暴力で解決することもあるかもしれない。さらには大事な時に居ないこともあるかもしれない。地上の父は例外なく皆、不安定な父である。

しかし「私達の」「天にいます」その「父」とは、地上のものではなく、永遠に存在されている（天にいます）すべての人（私達の）に対する誠の神なのである。

この「主の祈り」は、全て「私達」という一人称複数で記されている。

すなわち永遠に存在されている（天にいます）すべての人（私達の）に対する誠の神とは、ごく限られた一部だけの神ではなく、絶えず「私達の」神であり、「私達の」父であられるお方なのである。

もちろん私達は、「祈り」の時に一人奥まった部屋に入ってお祈りすることもあるだろう。しかし、その祈りの中であっても、「主の祈り」は絶えず「私達の」と呼びかけるようにと教えているのである。

それは、この「アバ・父」が孤独の神ではなく、実に親密な交わりを求めている神であるからである。ここに私達キリスト者の共同体としての意味を見出すことができるのである。

こうしたことが、祈りの初めの「呼びかけ」から用意されているというのはなんとという恵みだろうか！だからこそ、もし『教会に来なくとも、また交わりを持たなくとも、自分が信じていればいいじゃないですか。』という人がいるとすれば、その人は神が私達に求めているこの「主の祈り」をもう一度味わう必要があるだろう。

さて、更にイエスは「御名があがめられますように」と祈られた。

「御名」とは、その人の人格を指しており、つまりはその人その者を表している言葉である。この場合「御名があがめられますように」とは、「神ご自身があがめられますように」ということである。

また「あがめる」とは、「聖とする」「聖と認める」という意味である。それゆえ直訳すれば「神を聖とする。神を聖と認める」となる。言い換えれば「神を神とすること」と言える。

私達は、神を神とせずに自分のために利用することが多いのではないだろうか。それは「アバ・父よ。」と呼びかけて良いという安心感からなのか、いつの間にか神を神とせず、『神は自分のために動いてくれる便利屋』のように捉えていることはないだろうか。

家庭において、職場において、学校において、また教会の交わりにおいても同じである。

教会の交わりや奉仕が「御名があがめられるように」と、「神を神とすること」のためにあるのではなく、自分の都合に合わせたものになっていることはないだろうか。

私達はあらゆるところにおいて、「神を神」としているのだろうか。

本来、滅ぼされて当然の罪人であった私達は、決して近づくことが出来なかった聖い神に「アバ・父よ。」と親しく呼びかけることが赦され、惜しげもなく近づいても良いとされたのである（それは十字架の贖

いの故である)。そして滅びではなく、「御名があがめられますように」と、「神を神とすること」ができる者として招かれているのである。「御名があがめられますように」と告白できるとは、何と素晴らしいことであろうか。そしてそう招いてくださっている神は、何と愛に満ちたお方であろうか。「神を神とすること」が出来るとは、神の愛なしにはできない本当に素晴らしいことなのである。

この「頌主・頌栄・讃美」を、まず初めの「呼びかけ」と共に告白できることを心から感謝したい。神は私達をそのように招いてくださっているのである。イエスはこのことをまず初めに教えたのである。それゆえ私達は簡単に「御名をあがめる」ことから外れ、自分の都合に合わせて神を利用しないように心掛けたいのである。

最後に二箇所、聖書を開きたい。

ロマ 8:15「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父」と呼びます。」

マタ 6:33「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」